

旧大和川水系、河内湖・淵・池と人々の暮らし

永和駅から徳庵駅までの街歩き

行程 (全行程徒歩約6~7km)

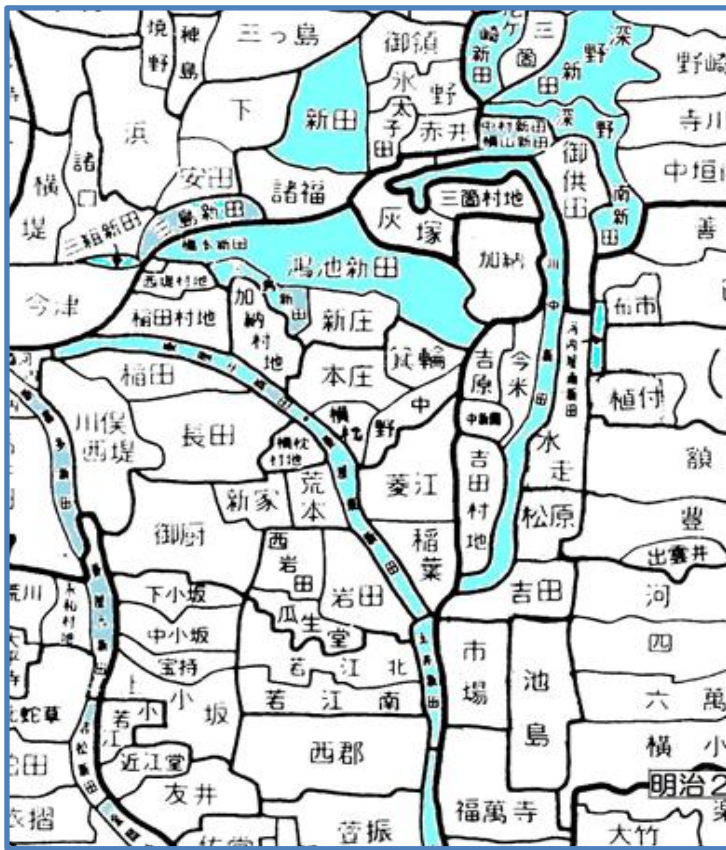
河内永和駅→鴨高田神社(式内社)→河内西国巡礼札所、長栄寺→渡し地藏尊→清水地藏→西岸地藏→蕪村句碑・新喜多橋の親柱→西堤神社→川俣神社(式内社)→稲田八幡宮→河内西国巡礼札所、観音禅寺→JR徳庵駅

①地名の由来 <<永和>>と<<新喜多>><<鴻池>>

<<永和>> 明治につけられた地名だが「永和」を「ながにご」と読んだ。この「ながにご」には深いいわれがあり永和に人たちの願いが込められていた。江戸時代には横沼、長堂、三ノ瀬が荒川村に属していたが、明治になり一つの村として独立したいという希望があり、ときの堺県令税所篤(さいしょうあつし)はこの要望を入れて荒川村から分離して一村とし、永久に平和であるようにと、「永和」と名付けた上、読み方を「ながにご」とした。しかし、長堂は東足代村に、三ノ瀬は荒川村に合併し、「ながにご」は旧横沼だけになり、「ながにご」は「えいわ」と変わった。

<<新喜多>> 宝永元年(1704)の大和川付け替えとともに行われた新田開発によって生まれた土地でそれぞれ川床であったところを水路(長瀬川)を残して埋め立てたもの。鴻池新十郎、鴻池喜七、今木屋多兵衛の3名が開発を請け負った。3名の名前を1文字ずつとって「新喜多新田」とした。

<<鴻池>> 本市鴻池の地名は伊丹市鴻池に由来している。宝永元年(1704)の大和川の付け替え後の新田開発者、鴻池善右衛門宗利より鴻池新田と名付けられている。もともと鴻池家は、戦国時代の武将、山中鹿之助幸盛の子ども、新六幸元が摂州河内郡鴻池村(今の伊丹市鴻池)に移住し、武士を捨て酒造りを生業としたことに始まり、屋号を村の名前「鴻池」にした。鴻池の清酒は評判良く、江戸で沢山売れた。「下りもの」という言葉があるが、鴻池の酒は馬の背に酒樽を載せて運んでいたが、あまりに大量に売れたので、船で運ぶようになったという。斯くして鴻池家の海運業が始まり、莫大な資産を蓄えた初代、鴻池善右衛門正成は天王寺屋五兵衛に学んで両替商などを営み豪商となった。



① 鴨高田神社（延喜式神名帳記載・式内社）

当神社は式内社で、渋川郡六座の筆頭に位置する官幣小社であった。創建は、今から1348年前の白鳳2年（673）と伝えられる。古代の河内は川が運ぶ土砂などで河内湖がどんどん陸地化していた。人々は生駒山麓や湿地帯の高いところに居住し農耕を営んでいたと思われる。ここに居住していた鴨氏の祖先神を祀ったことが神社の始まりで社名はそれに由来すると言われている。

鴨氏とは、加茂・賀茂・甘茂ともいい、「古事記」では崇神天皇の時、流行する疫病を鎮めるために御諸山（みもろやま・三輪山）に意富美和之大神（おほみわのおほかみ・古事記での神名）を祀った大物主大神（日本書紀の神名）の四世孫、意富多泥古を神君とともに始祖とする、と記されている。三輪の大物主大神の子孫である鴨氏は三輪氏のようにヤマトに居住せず、河内、摂津、葛城、紀ノ川流域を拠点としていたようだ。

祭神は、素戔鳴命に大鴨積命と神功皇后、応神天皇の四神を祀っている。

中世の鴨高田神社は岩清水八幡宮領として河内国高井田庄の名があり、八幡宮と称されていた。約400年前、この付近一帯が戦場となった大阪夏の陣（元和元年・1615）の兵火に巻き込まれ社殿の残念ながら全てが焼失したが、数年を経て再建されたのが現在の本殿である。

境内にある石造物として正面鳥居横に享保13年（1728）銘の石灯笼一对、拝殿前の安永3年（1774）銘の石灯笼一对

がありいずれも「八幡宮」の文字が彫られている。そして、本殿前には寛政9年（1794）銘の狛犬がある。本殿西側にある古木は「お駒樟」といわれ、今は枯れて幹が少し残っている程度だが、千年経ったものといわれている。これらのことは、鴨高田神社の歴史の古さと由緒の深さを物語っている。



② 百済山長栄寺 河内西国巡礼 第33番札所

百済山 長栄寺は開基、聖徳太子。江戸時代の高僧 慈雲尊者ゆかりの寺院である。元は真言宗高野派高貴寺の末寺だったが、現在は「正法律根本道場新真言宗本山」となっている。寺の本尊は、平安時代後期の作と考えられる像高106cmを測る木造十一面観音立像・檜一本造で、普段は本堂の厨子内に秘仏として祀られている。片脚を遊ばせ、腰をひねること通例の像容であり、左手に宝瓶（ほうびょう）、右手に錫杖（しゃくじょう）を執るいわゆる長谷寺式の十一面観音像。頭部と衣紋の表現に藤原様式をよく残すことから、昭和46年に大阪府の文化財に指定されている。

寺伝によると、推古天皇の時代に聖徳太子が創建され、太子自らが本尊を刻み、百済からの渡来僧恵聴（門脇禎二説）に供養させたことから、山号を百済山としたといわれている。寺は長らく荒廃し、江戸時代の安永年間（1772～81）に慈雲尊者が再興した。

慈雲尊者は、生涯を仏教の復興と梵学・サンスクリット語の研究に努めた人物で、享保3年（1718）大坂中之島の高松藩の蔵屋敷に生まれ、出家後27才の時に長栄寺に住んで復興に努め、宝暦8年（1758）には、生駒山麓額田谷にある不動寺の後を譲り受け、谷の奥にある長尾の滝のほとりに雙龍庵禅那台（ぜんない）を結んで京都へ移るまでの8年間居住修業した。本堂の北側には、後世に移された禅那台が残され、昭和45年に大阪府の文化財指定を受けている。

・天井雲竜図 原在中の落款 宮中の画家 天覧（119代光格天皇）

・境内の墓地内にキネマ小阪撮影所の俳優「市川好之助」の墓がある。大正15年（1926）7月に帝国キネマ撮影所によって建てられたことが記されている。墓前の献灯台には名優「市川百々之助」の名があり、好之助は撮影中に亡くなったといわれている。今で言う、労災認定死か。

③ 渡シ地藏尊、高井田地蔵尊など

高井田元町にある渡シ地藏の線香立ての石柱に「渡シ地藏」と刻まれている。祀られているのは、花崗岩質の高さ95cm・幅30cmの舟形光背内に、ほぼ等身大の高さ70cmの地藏菩薩立像。制作年代は確認されていないが、作風から江戸時代初期の作と推定されている。

近鉄永和駅と小阪駅の間を流れる長瀬川は、旧大和川の本流で川幅がなんと200m近くもあった。ここ渡シ地藏が立つ場所は川の西側堤防にあたり、舟の渡し場になっていた。

この地藏尊は渡船場が近くにあったために名付けられた。当時の大和川には名物の剣先舟が行き交っており、

お伊勢参りなどで暗越奈良街道を往来する人々で大変賑わっていた。船着き場に立つ地蔵さんは、いつも川の流れを見つめながら旅人の行路の安全を見守り、水難で亡くなった死者の霊を慰めていたようだ。

この地蔵さんは今日までの歴史の移り変わりや、人々の暮らしをつぶさに眺めてきたことでしょう。

宝永元年（1704）付け替え後は川床が埋め立てられて新喜多新田となり、船着き場はなくなった。

ここから北へ200m行くと暗越奈良街道に出会う。その角に道標があり、道標の西面には「枚岡一里三十三丁、東面には大阪高麗橋より……」とある。大阪高麗橋は奈良街道の起点だ。道標のあるお家は少し前まで茅葺き屋根の昔の佇まいを残していた茶店で、団子を売っていたそうだ。

この高井田には渡シ地蔵をはじめ西岸地蔵、高井田地蔵など多くのお地蔵さんが祀られている。辻々にお地蔵さんが祀られたのは、この辺りは、土地が低くちょっと雨が降れば雨水は西へ流れて水害をよく起こしていたからのようで、自然の厳しさの中で安穏な日々の生活を切に願う人々の姿がある。

④ 大通寺・融通念仏宗

西堤村の庄屋石津久左衛門は平野大念仏に帰依し、茅葺きの庵を作ったのが始まりという。その後、平野大念仏本山管長（41世・清雲上人）を務め、西堤村および近村の大念仏布教に努めた。延宝5年巳（1677）6月7日、寺号御改により「圓融山大通寺」と名を改めている。江戸末期から明治にかけての西堤神社内の宝寿寺は無住の寺だった。しかし、当時の大通寺・旭海住職は識見高く教えを乞う人多く、7カ寺の末寺を持つほど西堤村および近隣各村民の信仰を一身に集めていた。

西堤村でも明治4年神仏分離令により、西堤神社内の宝寿寺を大通寺に統合した。その当時宝寿寺の墓は、現在大通寺本堂横に祀られている。寺宝として「内助淵大蛇退治の古図」があり、鎌倉時代末期の絹本著色阿弥陀三尊来迎図は貴重な仏画として昭和60年に市の文化財に指定されている。



⑤ 西堤大皇神社（旧称・三十八社大明神）

言い伝えによると、西堤は堤防の西側の集落を表しているが、元をたどれば第二寝屋川の西側でないようだ。実は、430年ほど前に大東の内助淵（？）あたりから今の西堤に移ってきた。西堤とは、内助淵の西堤ということになる。

430年前、長い戦乱の時代が過ぎ、「西堤村」の人たちは、土地の開墾を始めた。まず、六郷川の南岸、稲田領の隣りに開拓地をつくり、続いて、さらに南の川俣領の中に今の西堤の村（枝郷）を造ったという。

他に下小阪（小坂神社）、西岩田、小箕輪、安田（鶴見区）、永田（城東区）に移住している。

祭神は明治4年以後天照大神、豊受大神で今の西堤の氏神。千鳥破風付き入母屋造りの拝殿、透かし塀内に春日造りの本殿が建っているが、明治初頭の神仏分離以前は三十八（みそや）社大明神と称したという。境内に「龍王山宝寿寺」という真言宗の仏寺があり、薬師堂・十六羅漢堂・釣鐘堂を備えていた。

三十八社大明神の祭神についてはよく分からないが、下小阪に鎮座する小坂神社が旧称、子守勝手明神または三十八社大明神と称しており、祭神は天水分神・国水分神・受鬘（うけのり）神の三柱としている。

推測するに吉野修験道の神々、山口神社・勝手明神、水神社・子守明神、金峰神社・金精明神の神々と考えられるのではと考えられる。

境内には内助淵と関連性のある鱗（うろこ）殿がある。鱗殿の伝説とは、昔、長田から大東市諸福にかけて広がっていた新開池には大蛇がいてと伝えられていた。長田のある家の内助という男衆が、ある晩長く風呂に入っているの、主人が怪しんで見に行くと大蛇の姿になって火を吹いていた。内介は自分の姿を見られたので逃げて池に入った。それでこの辺りを内助淵というようになったという。※長田の北辺りの



淵を「内助淵?」

その後、この大蛇が水神様を呑もうとしたが呑み込めなかったので、鱗を一枚残して去ったと伝えられている。その鱗が祠・鱗殿の御神体という。

西堤では日照りが続くとき、ここに村人が集い水神社（鱗殿）の扉を開け、大きな盥（たらい）を持ち出して、その中央に金銅仏（水神様）を祀り雨乞の祈祷が行われていたそうだ。祈禱中に大通寺の寺宝「内助（介）淵大蛇退治の古図」をかけて般若心経を唱えたという。古図には、大蛇と戦う岸辺の村人たちと、別の大蛇と舟に乗って退治しようとする構図になっていて、内助淵の広さと村人の暮らしぶりがユーモラスに描かれている。一見すると大蛇じゃなくて「龍」にも見えるほどである。

大蛇は水神様の使者だったのか、あるいは大蛇を怒らして水を呼ぼうとしたのか、今はその伝統が失われているのが残念なことだ。

皆さんにお尋ねです。巷説では「内助が蛇になった。」ですが、伝わっている話を正直に読めば大蛇が内助、人間の姿になって暮らししていたことになる。

では、なぜ大蛇が男衆・内助の姿になっていたのか。また、古図には2匹が描かれているのだろうか
なお、境内の大楠は、樹齢約400年幹廻が5.29mある巨大なもので市の保存樹木の一つになっている。

⑥ 川俣神社（式内社）

祭神は大己貴命、少彦名命、保食神。社名の「川俣」は、河内湖の海上交通権・漁業権などを掌握して河内湖周辺一帯を支配していたのではないかと考えられる川俣公に由来すると考えられる。

『新撰姓氏録』によると、

川俣公、日下部連同祖彦坐命之後也とある。後裔の川俣人麻呂は、東大寺大仏造営時、錢一千貫を寄進していることが文献に記されている。

彦坐命は、開化天皇の皇子で、和珥氏につながる。和珥氏のもとには、宗像、志賀島の海人族で難波の海を望む河内国若江郡は和珥氏の栄えた土地であり、信貴山越え、高安山越えの道は和珥氏の管理下にあった。

また、同じ系譜に日下部連がいる。日下部連は、河内湖東奥の入江にあった草香江を本拠とする氏族で、「日子坐王の子、佐穂彦王は、日下部連の祖」（『記』）と記している。日下部氏は、日下の宮、大王に奉仕する部民で、大日下王（大草香皇子）、若日下王（幡梭皇女・はたひのひめみこ）に仕える。雄略紀に「背日幸行之事、甚恐」（日に背中を向けておいでになった）という記述がある。

葛城氏の後、雄略天皇の時代、川俣公、日下部連の両氏が相伴って河内湖の海上交通権・漁業権などを掌握して河内湖周辺一帯を支配していたのではないかと考えられる。なお、和珥氏から、春日氏・大宅氏・櫛井氏・柿本氏・小野氏が分かれている。

⑦ 稲田桃再生プロジェクト

『河内名所図会』（享和元年・1801）にも紹介されているが、江戸時代後期この河内平野、特に稲田周辺には桃源郷と言われるほど桃の木がたくさん植えられたいた。

古代より、桃は邪気を払うという信仰があり、春ごとには花見をされ、また、桃の実はお盆のお供え物として重宝された。その桃は土地の名と取って「稲田桃」と呼ばれていた。実は昔話「桃太郎」に出てくる桃はこの稲田桃で果実も種も赤く先がとがっている。

楠根リージョンセンターでは、この桃の栽培再生プロジェクトを作り、平成14年秋に播種し、15年春に発芽、約10ヶ月育てた苗を移植することとなった。第1期移植の土地を第二寝屋川の堤に決め、役所の許可を取り、地域住民や楠根小学校の子どもたちの協力を得て、平成16年1月18日、約70本移植した。その後毎年植え増しされて現在は600本以上にもなっているそうだ。

⑧ 稲田八幡宮 祭神は、仲哀天皇、応神天皇、神功皇后

本市の西側端に位置する稲田は、古くには新開地へ合流していた旧菱江川の西岸に営まれた集落であった。稲田村由来帳によると室町時代～江戸時代には18軒ばかりがあった。永享3年（1431）年に古市郡にある誉田八幡宮から八幡宮を勧請された。八幡宮で有名なのは、境内にある樹齢約500年、樹高約35m、幹周り5mもあるイチヨウの古木である。村や神社の歴史を偲ばせる天然記念物として市の文化財に指定されている。

八幡宮の創建が約570年前という。本殿前でひっそりと静かに控えている狛犬も創建当時からあったと言われている。イチヨウと狛犬。いずれも人間の命には及びもできないほどの『長寿』。

イチヨウは現在でも生き生きと躍動しており、ますます成長することだろう。なお、イチヨウで幹周りが5m

もある古木は、府下ではこのイチョウ以外に記録はない。

次に有名なのは、秋祭りでの地車と長提灯の宮入である。このことについては地元のホームページに詳しい。

また、神社入り口には、慶応3年（1867）の伊勢神宮へのおかげ参りに行った人たちによって参拝感謝の意味を込めたおかげ灯籠がある。

⑨ 圓通山観音禪寺 河内西国巡礼 第30番札所

曹洞宗の寺であり、元々臨済宗妙心寺二世授翁宗弼（じゅおうそうひつ）禅師と大内義弘との協力で応永元年（1431）に字観音寺田（今の近畿車輛付近）に建立された大伽藍であったが、兵火に遭い焼失している。

後、村人が大松の根元より掘り出した聖観世音菩薩を本尊とし、慶安元年（1648）に上方代官（のちの初代天草代官）の鈴木三郎九郎重成を施主に再興されている。実兄、石平道人鈴木正三（しょうさん）を開基として現在に至っていること。現在の本堂は慶安元年建立されている。

観音禪寺は、もともとは三河武士であった鈴木正三が42歳の時に突然と出家する前、旗本として徳川家に仕えていたことから徳川家への報恩により、徳川大將軍三代（家康、秀忠、家光）を祀っている。

このことは、萬治元年（1658）に正三が記した古文書に残されている。この古文書は、寺の再興の記述のあと五ヶ條の家訓があり、その最初に徳川大將軍三代諷経（ふぎん）の記述があることから、徳川家をお祀りするために再興されたものと考えられる。

鈴木重成は「天草島原の乱」に鉄砲奉行として参戦し活躍していることもあってか、荒廃しきっていた天草の代官に抜擢されている。代官として赴任した重成は、行政の仕組みを整え、社寺（南蛮寺跡が有名）を建てるなど、民心と暮らしの安定に努め天草を救った。没後、「鈴木神社」に祀られている。

また、鈴木正三は、主として曹洞宗に立脚しながら、宗派の枠にこだわらない独特の仏教世界を拓いた江戸時代前期の偉大な思想家・仏教者・文学者（仮名草子作家）であった。現実の人間生活に仏法をいかに生かすか、働くとはどんな意味を持つ行為なのか・・・などを探った思索の跡は、近世日本の宗教改革的精神とも日本資本主義の源流ともいわれ、今や各界から幅広い関心が寄せられ、ある意味で世界的な存在となっているという。

秘仏の聖観世音菩薩は安産に靈験著しく、美濃岩村城主丹羽式部少輔氏定の妻が祈願し嫡男を無事出産された。報恩のため唐金の涅槃像・涅槃図と鐘楼門と梵鐘を、そして、境内に桃の木、千数百本を寄進したという。稲田村一帯が桃で有名になり、河内名所図会にも紹介された。この桃が有名な稲田桃の起こりと伝えられている。また、その種を引き継いでいる桃の木が数本境内にある（市の天然記念物）。

季節の果物というよりも「魔除け」の桃として大いに売れたという。楠根川や菱江川という交通の利を生かし、天満の市場へ出荷された歴史を持つという。また、花見客や野崎参りの参詣者が稲田を訪れたというから面白い。

梵鐘は元禄3年の銘があり鐘楼門が建立された当時のまま吊り下げられているという。

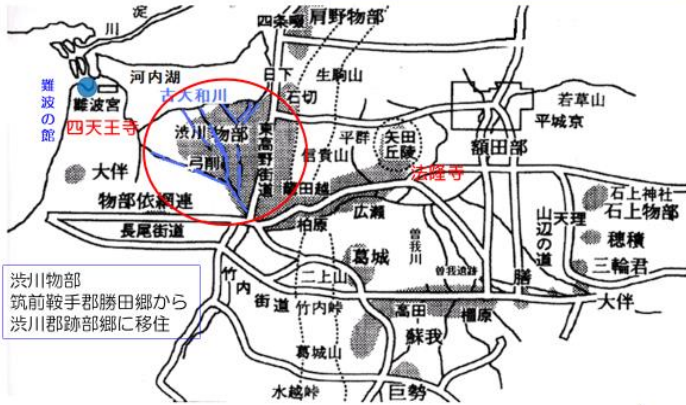
《まったくの番外編》 慈眼寺・野崎観音と天草、正覚寺（南蛮寺跡）



常夜灯の寄進者の銘文「肥前国平戸住 紙屋和三郎」

6世紀前半の勢力地図

「美作・旭川上流・誕生寺流域に居住していた片野物部族」の一部が北河内に移住



渋川物部
筑前鞍手郡勝田郷から
渋川郡跡部郷に移住



○美努村（みぬのむら）。延喜式神名帳に「河内国若江郡、御野縣主（みぬのあがためし）神社」がある。『書紀』河内三野縣主（みぬのあがためし）小根（『天武紀』に連の姓を与えた記事がある）『新撰姓氏録』河内国神別に美努連がある。美努連の人は、『続日本紀』37にも見える。また『三代美録』に「河内国若江郡の人、美努連清名云々」とある。若江郡にこの地名があることは明らかといえる。

8世紀頃の東大坂

式内社配置図



産湯稻荷社「産湯清水井」は、神代に味耜高彥根命が降臨して掘った清泉と伝え、日高清水・日高真名井と云う地名「味原」の由来



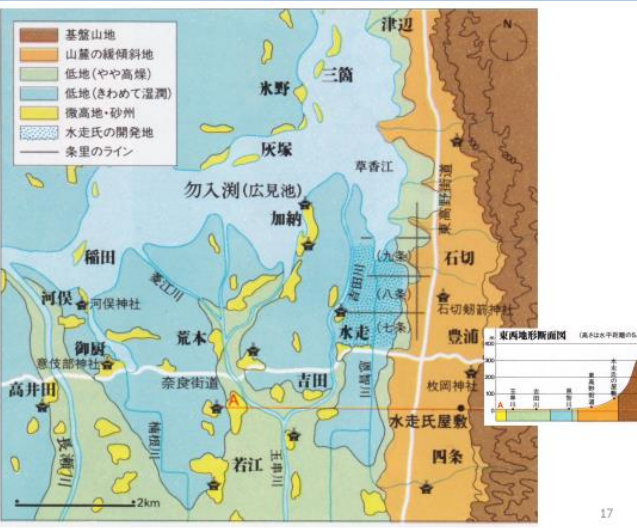
枚岡市史・第3巻

土蒙的武士団、水走氏の登場

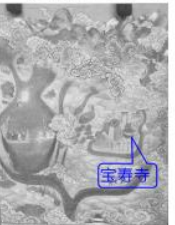
源義経外題
云開發相傳、云當時沙汰
次第、所申尤有其謂、早如元
令安堵本宅、可動仕御家人
兵士役之狀、如件
源（定）行

一 源康忠解決案 付源義経外題 土蒙
源康忠解決案 申進 申文事
請康忠 康忠即元令安堵動仕兵士役河内郡
有福名水走發田事
右康忠遷移案内、水走者依康忠代相傳地、親父
秀忠去天養年中申賜願宣、遂開發大功、被仰
止萬難公事、令進濟官物之間、敢以所無他妨也、
近日兵糧米使等、寄事於左右、迫出康忠代
官敢非分差妨之間、及所務違乱之弊、難堪衣第
也、早被停止被妨、安堵本宅、可動仕兵士役
之由、爲康忠發定在狀、百上如件、以解
壽永三年二月 日

◆寿永3年（1184）康忠が源義経によって本宅を安堵して貰うことに対して、御家人兵士役を勤仕することを約している。季忠は、長承の頃（1132～35）の御厨の官宣旨をもっており、大江御厨に定着しながら水走を開発したが、やがて源氏勢力の西漸につれて、子康忠が源氏との間に御家人関係を結んで、その保護を求めたものと推測される。
この時康忠が名乗った源姓は、いわばこの新しい契約のための方便であったのか、その子孫、康高は藤原姓を称している。



堤にあった圓融山大通寺・融通念仏宗
西堤という地名は、深野池、新開池に代表される「化石湖」と言われるように、新開池の西に続く池を内助淵といい、内助淵の西の堤に中世末期に人々が往んで「西堤」といったらという一説には、新開池の古い姿を勿入淵（ないりそのぶち）とって「右新開池凡廻二里計も有之往古勿入礎淵にて和歌名所池也。
今やと諸福村落合という処に跡有、後世誤って内助淵という」（『鴻池新田開発事略』）
長田の北から大東市の諸福の8km、東西4kmの今は亡き。まぼろしの新開池を地理学者は、「化石湖」と上手に表現している。



左の古図を、日照りが続くと村では西堤神社の水神社（鱗殿）の扉を開き、大きなタライを持ち出して、その中央に金銅仏（水神様）を祀り、後に古図をかけて、恵みの雨を祈ったという。
蛇は水神様の使者であったのか、あるいは蛇を怒らして水を呼ぼうとするのか今は、その伝統が失われ祭事がおこなわれていないのが残念である。
内助淵大蛇退治の古図（大通寺）